

『診断術の歴史―医療とテクノロジー支配』

一七世紀の初め医師は古代ギリシャ医学の流れをくむ考え方をそのまま守り、梅毒やペスト、天然痘など極端に著しい症状には名前がつけられていたが、急性疾患にたいする治療の主眼は原則として病気そのものを対象とするものではなく、患者の身体機能の調和を取り戻すことにあった。医師は病気を治すのではなく熱や下痢、嘔吐、出血、浮腫などを治療したのである。

一七六一年、アウエルブルガーが「打診法」となづけた検査方法を発表したが、なかなか顧みられるようにならなかった。この時代は未だ多くの医師が手を使う作業に携わることには偏見を持っており、医師の職業的および社会的地位をむしろはむと考えられたのである。診断に手技を使うことは品位を落とす、外科医と同じ階級に身を落とすことであつたのである。一九世紀にはいつて一八一九年ラエネクが「間接聴診法」を報告した。病変のある組織から聞こえる音の性質を調べることにより、生きている患者の胸部疾患をつきとめられるというものである。一八五〇年代になつてようやく米、英、独、仏でも聴診器の使用が受け入れられるようになった。

従来尿はマチュラにより視診だけが行われていたが、一六世紀のパラケルススから化学的な検索をはじめめる機運となった。糖尿病の尿の残渣をしらべたり、水腫と尿中アルブミン

の関係などが研究された。血液の血清と固形成分を化学的に調べることも診断と治療に役立つと考えられた。そこで一八七〇年代には血球計算も案出された。

一方、一八四六年には肺活量計が発明され、一八五七年には体温計が発明された。さらに一八九六年にはリヴァ・ロッチにより血圧計が考案された。さらに一八九五年にはレントゲンによりX線が発見され、視覚的な診断機器で医師が病気を評価するのに重要な変化をもたらした。二〇世紀になると一九〇一年アイントーベンにより心電計が作られて診断のための機器は目ざましく発達した。

複雑な化学的、顕微鏡学的、細菌学的な技法を体系的に医学に応用し、診断に役立てようと一八八五年、ミュンヘンに始めて臨床研究所が設立され、ついで米国に設立された。二〇世紀の冒頭商業的な検査施設が米国では殆どの大都市にできた。

一八世紀の病院はすぐれた診断や治療技術、設備を提供できるところか伝染病という危険にさらされていた。しかし、一九世紀末には欧米では病院数も増え威信がたかまり、医師にも患者にも魅力的な所になった。二〇世紀にはいつて病院を地域社会の財産とみなし、誇りにおもうようになった。複雑な診断や治療が必要なきは病院へいくのが最も安全で、最も快適で、しかも経済的だと考えるようになった。病院を総合センターとして、すべての医療活動の中核とすべきだと提案して、一八八〇年代米国ではメーヨー・クリニックが発

足した。そのころまた米国では、専門化の進行がすすみ、先端技術と共同医療がよいサービスを大衆に提供し、医師には自己実現の満足を与えた。

一七世紀からはじまった種々の診断技術の開発は、病気の経過に関する重要な洞察を与えてくれた。血液分析が自動化されると検査の増加に拍車がかかり、X線の使用も大幅にふえた。心電計、X線は患者を魅了したのである。そして可能なかぎり科学的な装置を使うように要求したのである。

一九七〇年代には医師にとつて診断の主要点はもはや事実をもとに結論を論理的に導き出す知的行為ではなく、どんな検査を指示し、どの専門医に相談するかという管理業務になつてしまった。病気をなおすには身体の部分をなおすだけでは不十分で、患者とのコミュニケーションを図ろうとする徹底的な努力によつて患者の信頼をつかみ、彼らの求めていることや希望を理解する必要があるのだ。テクノロジと集中型医療のためにわが国における今日の医療もテクノロジに支配された人間不在の医療になりつつあることが実感される。聴診器や血圧計やX線の開発の歴史も興味深く読めるが、そのあとに続くテクノロジ支配の医療を医師の手に取り戻すためにはどうすればよいか、考えさせられる本である。

(藤倉 一郎)

(平凡社・東京都目黒区碑文谷五―一六―一九、電話〇三―五七二―二一―二五四、一九九五年発行、A五判、三七四頁、四五〇〇円)

安井広著『ベルツの生涯―近代医学導入の父―』

一
ベルツという人物への関心は、人には様々なものがあるろう。筆者にとつて岩波文庫版の『ベルツの日記』への関心は、ベルツが浜松へ往診したという伝聞から患者を捜した事がある程度である。

故安井広氏がベルツ研究に着手していた事は、御自身の話から承知していた。「東海蘭学の会」の結成以来、江馬家文書の整理と書状の翻刻出版という勉強会を通じて、学恩を蒙つたものである。平成七年六月の名古屋での日本医史学会総会で主催者の誘いもあつての好機に、江馬庄次郎、青木一郎、安井広の三氏の業績を調べあげ発表したのは、故人達への謝意を表したものである(『日本医史学雑誌』、41―2、および、配布資料参照)。

このたび本書を紹介するにあたり、安井氏がどのようにベルツに迫つたのか知りたく思つたのは、それが生涯の研究課題であることを聞いており、研究発表もあり(『日本医史学雑誌』、30―2)、校正中の逝去という事が念頭を去らなかつたからである。

安井氏が敗戦後、中国から帰国されて、愛知県幡豆郡吉良町上横須賀に開業後、郷土史研究から地域の医史学研究に向い、ベルツの妻のハナの生涯や墓の所在に触発され、東三河